

全寮の子学園

ふたなりチン子ちゃん



うさぎロボ 著

1章 全寮制〇子学園、〇等部に通う引っ込み思案の少女にある日チ〇ポが生える

職員まで女性のための全寮制学校。

その〇等部の寮の一室。

そこが早乙女明日音の部屋だった。

前日、早乙女の寮の同じ部屋の親友が転校してしまった。

泣く早乙女を遅くまで友人たちは慰め、泣きつかれた彼女を部屋のベッドに押し込んでいった。

一人部屋で寝ていた早乙女。

朝、他の生徒が起きて部屋を出て行っても、疲れきってしばらく寝ていた。

しかし、誰も守っていない校則を一人で守り、誰も見ていない所をつい破ってしまっても誰かに見られていないかと気に病む、まじめで気が弱い早乙女は、いつまでも寝ていることは性格的に出来なかった。

自然、目が開く。

ベッドの中から部屋を見回し、ため息をつく。

——もう空巳ちゃんはいないんだ……

普段なら、先に起きて起してくれた親友。

まじめというわけではなかったが、スポーツをやっていて朝は早かった。

——男の子みたいにはきはきしてて……。

いろいろ頼ってしまっていた。

これからは、もうそういうわけには行かない。

——私も、空巳ちゃんみたいに……男の子みたいにならないと。

寝る前にもそんなことを考えていた気がする。

シーツを跳ね除け、上体を起こす。

すると、何か違和感を感じる。

股間に、何かはいつている。

いや、性的な話ではない。

内部にではなく、あくまでもパンツの中、ということだ。

パジャマの前を見る。

突っ張っていた。

中から、ビクビクと痙攣する何かが突っ張って、テントを支える柱のようになっていた。

「……え？」

首をかしげる。

それがなんなのか、まるっきりわからなかった。

処女で、男のものなどろくに見た事がない。

父や兄と一緒に風呂に入ったのも相当昔で、うろ覚えである。

だからその、大抵の男ならうらやましく思うほどの、二十センチ越えの巨棒が、彼女がイメージする「おチンチ〇」と同じものだとはとても思えなかった。

大体、父も兄も彼女の前でギンギンになる事などなかったのだし。

「な、なにか入ってる？」

ズボンを引っ張ると、パンツの中に入っているのがわかる。

棒状のものが、ビクビクと痙攣しながら突っ張っている。

唾を飲む早乙女。

処女で、あまりそういう事に詳しくない彼女。

それでも、周りが話す男の物の知識を聞くと話に聞いて、僅かに吸収していた。

——う、嘘、この感じ……でも、これ大きすぎるし……大体……私についてるのはおかしいし。

パンツを引っ張る。

と、ビンと音を立てるように何かが突き出す。

「ひいっ！」

ビクビクと、布の圧迫から解放された巨棒が天を突く。

「うわ、うそ、亀さん……え？」

子供のころ亀を飼っていた早乙女には、その自分から生えている巨棒のパンパンに張った先端はまさしく亀の頭にしか見えなかった。

自分から生えているという気安さからか、その首を握る。

「ああっ」

ビクッと体を強張らせる。正座を崩したような女座りだが、その膝が引き締まる。

目を硬く瞑り、モノを握る手に力を入れる。

入れると、さらにそこから刺激が体中に広がる。

「ああっ、う、うそっ……なにこれ……」

顔が赤らむ、ビンビンと巨柱がさらに仰け反る。

それを握ったことと、その異様な感覚……それは快樂だが、〇子高生にもなって自慰もしたことがない彼女にとって異様な感覚でしかなかった。

息が荒くなる。

慌てて、肉根から手を離す。

「こ、これって一体……え、でも、ち、チンチ〇？ でも、こんな……」

周りを見る。

もちろん誰もいない。

立ち上がる。

ズボンとパンツを半端に下ろしたままで歩きにくい。

一度ベッドに突っ伏す。

うつ伏せに。

普段ならなんでもない倒れ方だ、顔から倒れなければそれでいい。

だが、今は普段とは違った。

巨柱がベットに押しえ込まれる。

「おぐっ！ ああああああっ！ ち、チンチ〇がっ！」

巨柱に体重が掛かりかけ、慌てて横向きに転がる。

男ならそんな一番大事な所に体重をかけるこけかたはなかなかしないが、早乙女の場合昨日までただの少女で、いきなり巨柱が建設されてしまったのだから慣れなくてもやむをえないだろう。

「あ、危なかった、おチンチ〇折れる所……って、あ」

口を押さえる。

——チンチ〇って言っちゃった。

別に一人なら気にすることもないと思うが、そこは一人のときにルールを破っても気にする、気の弱い早乙女である。

とにかく、姿見の前に立つ。



ズボンとパンツを下げる。

「あ……うわ、大きい……」

比べる基準がないにもかかわらず、女の本能でその二十センチ越えの巨柱が大きいことを理解する早乙女。

見ているだけで、胸が高鳴る。

それはやはり……自分に生えているからで、別に巨根好きというわけではないだろう。

見ているとさらに興奮が高まり、ギンギンにそり立つ。

その巨柱は、彼女の女の割れ目の上の辺り、小振りな赤い宝石があった場所から生えていた。

「あっ、お豆さんが……」

竿を横にしたり、折れそうで怖いがゆっくり押して上のほうを確認するが、女の宝石は見当たらない。

——まさかお豆さんが成長して……そんなことあるわけないよね。

割れ目を見ていて、気づく。



「あ、き、キ○タマがない！」

言って、口を押さえる。

他の友人たちが男の前だけで言わないいろいろな言葉の一つ。

しかし彼女のように初心な少女は、同性の前でも口にしない。

それを思わず口に出してしまい、真っ赤になる。

羞恥で興奮し、巨柱が張り裂けそうになる。

——ち、チンチ〇だけ生えて、タマタマがない……こんなわけのわからない。でも、生えるだけでもないはずだし……

頭が混乱してくる。

元々、しないわけがない状況だ。

目が覚めてくると、さまざまな問題が頭をよぎる。

——これじゃパンツ穿けない……

いや、穿けるが、股間に何を入れているのだという事になるだろう。

スカートを内側から跳ね上げつつ、その辺を歩いたら皆がどういう目で見てくるか。

一月ほど前の授業を急に思い出す。

護身術の授業だ。

この全寮制学校、聖ミーポール学園は生徒はもちろん、教師や事務員にいたるまで全員女性である。

だから妙な男が時々潜り込んでくるという。

そういう者から女性が身を守り、また報いを与えるには**男性にしかない体の特定部位を集中的に狙うことが必要だ**、という話だった。

早乙女もいろいろな型を空巳と組んで練習した。

後ろから抱きつかれたときに軸をずらして握り潰すとか、正面から来たときには顔を攻撃して気をそらして膝で蹴り潰すとか……

あまり、早乙女は必死にやらなかった。

他の女子も大体同じだ。

むしろ、その男性特有の部分についての話で盛り上がったぐらいだ。

どうせそんな人間は来ないだろうし、来ても自分が前に出る事はないと思っていた。

何より、早乙女はそんな絶対急所をゴリゴリ責めまくり、ナノテクで治るから大丈夫！ というようなタイプの人間の対極に位置するのだ。

にもかかわらず、今、急に当事者になった。

なったのではないか、と危惧している。

唾を飲む。

——わ、私とその……この、おチ……男の人のをビンビンさせてその辺歩いたら、私もそういう人だと思われるんじゃないの？ そうなったら……

巨棒の下を手で庇う。

「皆にキ〇タマ蹴られちゃうよ！」

守ろうと指で探るが、何も無い。

彼女の状態はいわゆる「竿あり・玉無し」タイプのふたなりであり、攻撃されると危惧している男性特有の部分はついていない。

姿見を見てそれを認識していたことを思い出し、少し安心する。

「よかった、キ〇タマ蹴り潰されることはないんだ……」

と、ほっとしたら気づく。

口を押さえる。

「あっ……」

周りを見る。

——ま、また……

「またキ〇タマって言っちゃった！」

巨柱が噴火寸前の火山のように膨れ上がる。

そうするためにわざとやっているのかと思えるほどだ。

「と、とにかく、早く食堂に……」

出たいが、どうすればいいのかわからなかった。

と、そこで早乙女に圧倒的ひらめき。

「あ、そうだ！」

握る。

一物を握り、突如手を上下させる。

「はぐうっ！ こ、これで……」

ごしごと、遠慮なく巨柱を擦る。

掌が先端部を擦る文字通りの荒削りだ。腰が引ける。

「あ、あぐっ、こ、これで本当に……」

手コキについて、友人の誰かが話していたのを覚えている。

それで出させれば、萎えるという話だ。

しかし細かいやり方は知らない。

潤滑油がない状態なら、首の所を握って皮を上手く利用するのがいいなど、わかるわけがない。

「おおおおっ、ひ、ひ……す、すごい……男の人って、こんなのが気持ちいいんだ」

痛みと興奮で勃起は強力に続くが、そのまま手コキを続けてもとてもいけるとは思えない。

先っぽを垢すりのごとく擦るやり方は刺激が強すぎた。

これがいいなどと覚えられては、将来彼女の恋人なり夫なりになる人間は災難だろう。

まあ、首握って、といえはそれで済む話だが。

「ああっ、ひぐっ、むり、こんなの無理……」

「ああっ、ひぐっ、むり、こんなの無理……」
涙が出てくる。
今日一物が生えた人間が、

潤滑油無しの 亀頭責め

では耐えられるわけがない。
それは手コキというより
緩い拷問でしかない。

拷問

それでも、がんばり屋の早乙女はやめない。

涙が出てくる。

今日一物が生えた人間が、潤滑油無しの亀頭責めでは耐えられるわけがない。

それは手コキというより緩い拷問でしかない。

自慰もしたことがないため、これは違うだろうという判断がまるで働かなかった。

それでも、がんばり屋の早乙女はやめない。

「おおっ、おごっ、おごっ」

獣のようなうめき声。

本来、今日生えたばかりの一物など刺激に弱く、少女の柔らかい手でちゃんと手コキをやればすぐに射精しただろう。

しかしやり方を誤って地獄を見ている。

「ひいい、も、もうだめ……だめだよっ」

仰け反り、膝を突く。

それでも、刺激によって巨柱はギンギンという救われない状態。

ついに白目を向き、横向きに倒れる。

ベッドでこけた時の恐怖がよほど強く染み付いたのだろう。

自分に生えた巨柱を握ったまま、下半身丸出して白目を剥いた早乙女。
相当悲惨な状況だ。

そこに、少女が入ってくる。

「アスネ、遅いぞ」

と、早乙女が倒れているのに気づいて飛び上がる。

「あっ、ど、どうしたの……って、ひっ！」

下半身丸出しにも驚くが、そこから生えているものにさらに驚く。

「ち、チンチ〇はえてる……しかも……」



「ち、チンチ〇はえてる……しかも……」
膝を突いて、まじまじと見る。

「超巨根 じゃん！

うほ、デッカイ！」
目を輝かせ、先端を握る。

膝を突いて、まじまじと見る。

「超巨根じゃん！ うほ、デッカイ！」

目を輝かせ、先端を握る。

男が一人もない全寮制〇子高。

決まった休みに実家に帰る以外外に出られない状態でそこに閉じ込められている年頃の少女たちは、ネットで情報だけを得て欲求不満や妄想を膨らませていた。

「すっげえモノ持ちじゃん……よし、ちょっと手コキやってみよう」

首を持ち、皮を生かして手を上下に動かす。

と、あつという間に白濁液が放出される。

「おわっ！ 超早漏！ 受ける！」

嘔き出す少女。

早乙女が根元を握って気絶しているため、彼女は竿の下に玉がない事に気づいていない。

彼女は、早乙女が男だっと思っていた。

もし玉がなく、女の割れ目があって、雌豆の位置から巨棒が生えているのに気づいたら流石にこんな冷静ではいられないだろう。

「うふふ、こりゃ面白い事になった……まさか男が紛れ込んでるなんて。皆には内緒で、楽しまな
きゃ……」

巨棒は、まだそり立っている。

「おお、元気。若いからね」

もう一度素早く手を動かすと、またあつという間に出る。

「ゲラゲラゲラゲラ！ ちょ、早漏過ぎる！ 入れたら即出ちゃうよこれ！ っていうか、絶対童貞
ね。っていうか、出終わってもまだギンギンなんですけど！ 巨根絶倫超早漏ってあんた、すげえ三
段オチ！」

笑いながら、もう一発抜く。

抜きながら、ふと笑うのをやめる。

唾を飲む。

手を見た、粘液が付いている。

それと、巨柱を交互に見る。

しばらくして、我に帰るように頭を振る。

「……いやいや、これから授業だし」

実は、**ふたなり汁**には催淫効果がある。

しかしそれはなりふり構わず一物にむしゃぶりつく、というほどの効果はない。

少し迷わせる程度だ。

これから授業、と思っていれば振り払える程度の効果。

さらに何度か抜いて、やっと巨柱は萎える。

急いでパンツを穿かせる。

玉がない事に気づかず、抱き起こしてベッドに転がす。

「とりあえず、今日は病欠にしておこう」

教師らに休みと届けたとメモを残す。

床に飛び散った精液は面倒なので放置して、部屋を後にする少女。

早乙女は実は巨根男子と、とんでもない誤解をもって出て行ってしまった。

体験版終わり

この後一旦ふたなりチ○ポが無くなった早乙女に追及の手が
そして、再び生えた巨柱でふたなりレズセックスという展開
さらに、その現場をクラスメイトに踏み込まれるというラストへ

続きは製品版でお楽しみください